

特集コラム 星槎グループのコロナ禍への対応と課題

Zoomによる全国一斉授業やオンラインフィールドスタディを試みた高大連携

天野 一哉・太平 奈美佳

太陽神アポロンは遠矢の神でもあるという。ホメロスの『イリアス』ではアカイア（ギリシア）軍に疫病の矢を射掛ける描写がある。また、他方では医神アスクレピオスの父として治療の神ともされる。もちろん mythology（神話）の話である。

太陽の冠の名を持つ新型ウィルスが世界中で猛威を振るっている。この降り注ぐ禍いの矢を神ならぬ人の手で防ぎ、教育、学習の営みを継続しなければならない。

星槎グループでは、本学に高大連携委員会（以下本委員会）が設置される以前から、星槎に関わる全ての学習者の学習機会シームレス、教職員の資質の向上のために「大学、高校のみならず星槎グループの機関（事業所）全体のシームレス」をすすめてきた。本委員会でも、星槎国際高校の全国一斉授業（年間を通したプロジェクト学習）のサポート（大学教員による指導、プレゼンテーション大会の審査員）、高大連携連授業（リエゾンプログラム：大学教員による高校生のための特別授業）、高大連携科目の設置、高大連携体育授業、アクティブラーニング海外視察（台湾、香港、マカオ等、アクティブラーニング先進地域への高大教員の派遣）を行ってきた。

2020年度も、上の活動を大学教員が全国各地の星槎国際高校学習センターに赴き、実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大により、中止、あるいは変更を余儀なくされた。ただ、星槎大学、星槎国際高校のコロナ対応が整い、第一波がある程度落ち着いた6月からは、Zoomによる全国一斉授業とリエゾンプログラムを再開した。

以下に、高校教員によるコロナ禍での「教育、学習の営み」の具体的事例として星槎国際高校那覇キャンパスの取り組みを取りあげることにする。

星槎の教育においては、体験・実践からの学び、人や自然や暮らしに直接接触ることから得られる効果を重視している。特に、フィールドワークは欠かせない活動のひとつである。しかし、2020年度はスタートから新型コロナウイルス感染拡大により、休校や活動・移動の制限を余儀なくされた。那覇キャンパスでは、これまで教育・学習の中核としてきた「関わり」が思うようにできないという、かつてない状況に陥った。

そのような環境においても、柔軟で臨機応変な新しい学びの手法を模索し、オンラインでできるフィールドワークを実現できないかと思いついた。手法としては、昨年（2019年）の教員免許更新講習において、沖縄県平和祈念公園からのZoomによるオンライン中継を実

施していたことから、これを応用した。内容としては、過去3年にわたり沖縄での共生実習を実施してきた星槎大学の保屋野初子先生に相談し、「長野県小谷村大綱（おあみ）」で里山の暮らしと文化を伝承している移住者グループ「くらして」にも協力を仰ぎ、2020年6月26日に「オンラインフィールドワーク～里山の暮らしから学ぶ～」を実施した。

このテーマにした背景には、コロナ禍において暮らしが変化するなかで、里山の暮らしから非常時にも強く生きられる暮らし方を見出し、自分たちの身近な地域や生活とのつながりを知って、より深い学びへとつなげてほしいというねらいがあった。その効果がどうだったのか、生徒の感想から一部抜粋し紹介する（表記はそのままとした）。

- ・都市部とは違って集落自体が家の様な存在であるため、コロナ禍の中でも人とのつながりが途切れず日常をこなせた様子が印象に残った。また、その有り難みを感じた。
- ・長野には海がないので新潟から塩を運び、代わりに長野の山の幸と交換していた。「塩の道」
- ・都会の「豊かさ」、田舎の「豊かさ」があることを知った。
- ・おとなしく自粛につとめていたところ、報道が目につくような生活環境になってしまい、物狂いを起こすような生活を送り、気をすり減らすようにして一日を過ごしていた。大綱の営み、日常は実は充実していて人々のあるべき姿がそこにあって、我々の身近にはない豊かさを見つけられたのではないかと感じた。
- ・沖縄と長野をつないだZoomの中で多くの違いを見つけられた。（いろり、食文化、米づくり、おじぞう様、家の形、塩の道）
- ・「どこにも行けない」ではなく「どこにも行かなくていい」という発想の転換

このように、画面越しではあったがオンラインでその土地や暮らしに触れることができ、生徒たちは様々なことを感じ取り、予想以上の手ごたえを得ることができた。

その他の相乗効果として、広報的活用があげられる。その当時は、各方面で活動をオンラインに切り替え、どこも方法を模索している状況だったこともあり、内容に興味を持った地元紙から取材を受け、授業の様子が後日新聞に掲載された。今回の例をもとに、限られた環境においてもできることから実行に移し、今後さらに充実した活動を行っていきたい。